

Title	<大會抄録>ウイグル佛教寫本に關する年代論：八陽經と觀音經
Author(s)	小田, 壽典
Citation	東洋史研究 (1998), 57(3): 496-496
Issue Date	1998-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155208
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

したい。

ウイグル佛教寫本に關する年代論

——八陽經と觀音經——

小 田 壽 典

ウイグル文「八陽經」は漢語偽經の翻譯である。しかしたとえば、「皆口常之 說其善語 善法常轉 即成聖道 說其邪語 惡法常轉 即墮地獄」(觀智本)とあるのに對して、ウイグル文の邦譯を示すと、「(前略)、もしこれを理解せずして全く違ふものにとれば、あるいは惡業に追從し、邪と正と、善と惡と、二種の行爲をなせば、その人は、この世界に流轉する。あるいは、上方の輝ける諸天(神)の地において歡喜する。あるいは、下方の三惡道へ入り苦惱する」とある。すこぶる變容されている。この變容がイランの死後の世界を表象するかにみえることはいぜんに論じた(『東方學』五五、一九七八)。ここではウイグル文は、いつ、どこで翻譯されたかについて、ウイグル寫本と漢語本ほかとの對比から考えてみたい。

昨年『東方學論集』に發表された木村清孝氏の論考は中國における偽經「八陽經」の思想的成立事情に關說して意義深い。ただ偽經の字句の變遷については異論がある。大部分の漢語「八陽經」の敦煌寫本は派生的變化をへたもので、續藏本は後世の校訂を取り入れているにしても、むしろ原本の字句を保持し、八世紀に我が國に傳

えられたといわれるものに遡りうるのではなからうか。このことはウイグル翻譯經典の成立時期を考える上で重要な觀點となる。八陽經と觀音經のウイグル寫本はそれぞれ初譯と改譯の二種に大別され、前者はソグド的要素を保持して初期のウイグル佛教寫本を代表しうるものである。